

【企画書】

Socially Engaged Art

ソーシャリー・エンゲイジド・アート展

社会を動かすアートの新潮流

展覧会+ 連続トーク&ディスカッション+ 講演会

- 開催場所 : アーツ千代田3331 メインギャラリーほか(予定)
- 開催期間 : 2017年2月18日(土)~3月5日(日)
- 主催 : NPO法人アート&ソサイエティ研究センター
- 助成 : 文化庁、アーツカウンシル東京、資生堂
- 共同企画 : 森美術館
- 協力 : アーツ千代田3331

特定非営利活動法人 アート&ソサイエティ研究センター



社会と向き合うアーティストたちは、新しい方法論で現実世界に介入し始めた

近年、世界的に「ソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)」と呼ばれるアートの在り方に関心が高まっています。SEAとは、美術館やギャラリーを中心とする既存の閉じたアートワールドから脱して、現実社会に積極的に関わり、人びととの対話や協働のプロセスを通じて、何らかの「社会変革(ソーシャル・チェンジ)」をもたらそうとするアーティストたちの活動をいいます。「ソーシャル・チェンジ」といっても、その幅は広く、日常生活における小さな変化から社会制度の転換まで、目指すところは多様です。表現においても、具体的な地域問題や福祉、教育、環境、さまざまなコミュニティ活動や政治運動をビジュアル・アートやメディア・アート、パフォーマンス、演劇といった創造的な表現と結びつけ、一見「これがアート？」と思えるような分野横断的スタイルを持つこともあります。しかし、その活動の核には、必ず“エンゲイジメント(他者との深い関わり)”があり、いつきのイベントや「場づくり」ではありません。

SEAの世界的潮流と同調するように、日本でも、とくに3.11以降、地域社会と関わるアーティストが増えてきました。しかし、まちおこしや観光のためのツールとして実施されるプロジェクトが「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」と理解されている場合も多く、「現実社会の変革を目指すアーティストの実践」という、SEAの重要な役割が曖昧になり、日本流の融和的なSEAに形を変えてしまう傾向が見受けられます。

本展は、海外の代表的なSEAプロジェクトを紹介するとともに、日本のアーティストをSEAの文脈の中でとらえなおすものです。3・11以降顕著となった、社会への関わりを強く意識した日本人アーティストの活動に注目し、これまでの実践事例のドキュメントを展示するほか、本展を機会に東京で新しいプロジェクトを展開する3アーティストの活動をライブと記録で紹介します。

国内外の実践を比較議論し、日本におけるSEAの特性や可能性を探る、日本初の展覧会として、海外発信も予定しています。

本展が今後の若いアーティストの活動を刺激し、加えて、地方創生が叫ばれる現在、地域のアート団体をはじめ行政、市民などに新しい発想をもたらすきっかけとなることを期待します。

企画内容

【概要】

《プロジェクト・イン・TOKYO》 アーツ千代田3331周辺にて

- 3名の日本人アーティストを招聘し、プロジェクト実施
- 2名の海外アーティストを招聘し、プロジェクト実施

《展示 SEAの代表事例と歴史的考察》 アーツ千代田3331のメインギャラリーにて

- 日本のSEAアーティスト、5名(組)の作品(ドキュメンテーション)展示
- 海外のSEAアーティスト、5名(組)の作品(ドキュメンテーション)展示
- 歴史的考察にもとづく先駆的事例の紹介

《関連イベント》 アーツ千代田3331のメインギャラリーにて

- アーティストによる連続トーク+ディスカッションおよび講演会
(森美術館との共同企画予定)
- 参加プログラムの実施

《関連事業》

本展の成果はバイリンガルでカタログを発行。国内外に発信し、関係者に広く配布、加えて、展覧会を記録、専門家の寄稿をまとめた書籍を発行予定。

《キュレーション》

SEA展実行委員会コアメンバー(秋葉美知子、工藤安代、清水裕子、藤元由記子)

〈展示内容〉

アーツ千代田3331のメインギャラリー(約475㎡)では、SEAの活動を展開している国内、海外のアーティストのプロジェクトと歴史的な事例を紹介(作品、動画、写真、資料などが主となる)。また、国内3名、海外2名のアーティストを招聘し、実際に会場周辺でのプロジェクトを実施する(一部は森美術館が開催するシンポジウムと連携予定)。関連イベントとして、期間中に展覧会会場で連続トーク、SEAの現状と日本における可能性について語り、議論する講演会も開催予定である。

海外アーティスト（プロジェクト実施）

[Projects in Tokyo]

Pedro Reyes (United States / Mexico)

ペドロ・レイエス（米国・メキシコ）

《ピストルをシャベルに》

Palas por Pistolas

- 麻薬取引の拠点で発砲事件の絶えないメキシコ西部の都市クリアカンで、レイエスは、地元の店で電気製品を購入できるクーポン券と引き換えに、市民から銃を集めた。これによって集まった1,527挺の銃をローラーでつぶして板状にし、地域の鋳物工場でシャベルに加工。こうして1,527本のシャベルが出来上がった。さらにそのシャベルを使って、地域団体や学校の生徒たちが市内のパブリック・スペースに木を植えた。
- 東京では、会場にシャベルの実物を展示するとともに、港区の筈小学校の生徒50人が校庭に植樹を行う。



《Palas por Pistolas》2008-～

Darren O'Donnell (Mammalian Diving Reflex) (Canada)

ダレン・オドネル(マリアン・ダイビング・リフレックス) (カナダ)

《子どもたちによるヘアカット》

Haircuts by Children

- アーティストリック・ディレクター、ダレン・オドネルを中心とするアート&リサーチ集団が企画制作し、カナダをはじめ、世界各地で地域の学校や団体とコラボレーションしながら行っているプロジェクト。10～12歳の子どもたちが、プロの美容師から講習を受けた後、地域の美容室を借り、大人の客に無料のヘアカット・サービスを行う。そのねらいは、「こどもたちには美的・創造的な決定のできる個人としての責任と自信を持たせ、大人たちには、従来の大人と子どもの力関係が逆転した非日常的な体験により、子どもの能力を見直すきっかけを提供する」こと。
- 東京では、足立区のオルタナティブ・スクール「こどもみらい園」の児童たちがヘアカットに挑戦する。



《Haircuts by Children》2007-～

海外アーティスト（作品展示）

[アーティストと作品]

Suzanne Lacy (United States)

スザンヌ・レイシー 《The Roof is on Fire》1993-1994

1945年カリフォルニア州生まれ。カリフォルニア州立大学で心理学を学んでいた1970年、ジュディ・シカゴのフェミニスト・アート・プログラム(FAP)に参加したことをきっかけにアーティストの道へ。1970年代初めからアーティスト、アクティビスト、教育者、著述家として、実践と理論の両面で活動。《The Roof is on Fire》は、オークランド市の高校生220人が屋上駐車場に止めたクルマに座って、暴力、セックス、ジェンダー、家族、人種について語り合うというイベントを通じて、ポジティブな若者の姿を伝えた。



Rick Lowe (United States)

リック・ロウ 《Project Row Houses》1993-

1961年、アラバマ州生まれ。コロンバス・カレッジとテキサス・サザン大学で、絵画・ビジュアルアーツを学ぶ。20代半ばからテキサス州ヒューストンで、社会問題をテーマとし作品を制作していたが、1990年代初め、ひとりの高校生の一言をきっかけに、コミュニティの社会的、経済的、文化的ニーズに直接応える活動に方向転換。打ち棄てられていた22戸の住宅をアーティスト仲間とともに買い取り、改修して、アートと社会サービスを複合したプロジェクトに展開していった。



Park Fiction (Germany)

パーク・フィクション 《Gezi Park Hamburg》1994-

ドイツ、ハンブルグの貧困地区ザンクト・パウリの川沿いの土地に高層住宅とオフィスビルを誘致しようとする市の開発計画に反対して1994年に起こったコミュニティ・プロジェクト。アーティストのクリストフ・シェーファーらが運動を主導し2002年の「ドクメンタ11」をはじめ、多くのアート・イベントや音楽祭に出展。こうした活動の結果、2005年、市は計画を断念し、公園が実現した。



Ai Weiwei (China)

アイ・ウェイウェイ 《14,000 life jackets in Berlin》2016

1957年中国・北京生まれ。78年に渡米し、現代美術に出会う。93年に帰国後、出版や展覧会の企画、建築プロジェクトに携わるとともに、自らも美術家として世界各地で作品を発表。2008年、北京五輪のメインスタジアム「鳥の巣」の設計に参加したが、オリンピックは政府のプロパガンダにすぎないと開会式を欠席した。近年は人権活動家としての運動を本格化、2016年には、ギリシャのレスボス島に流れ着いた難民たちのライフジャケットをベルリン、ウィーンで展示し、ヨーロッパの難民政策に疑問を投げかけた。



Fifth Season (Netherlands)

フィフス・シーズン

フィフス・シーズンは、精神医学と日常を結びつける試みとして、オランダ、デン・ドールデルの精神科病院で1998年から行われているアーティスト・イン・レジデンス・プログラム。招かれたアーティストは、1シーズンの間、病院に滞在して患者たちと接するという、非日常的な体験から創造的な刺激を得、自らの視点でアート作品を制作する。



日本人招聘アーティスト（プロジェクト実施）

[Project in Tokyo]

西尾美也

1982年、奈良県生まれ。2011年、東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部専任講師。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを国内外で展開。アフリカと日本をつなぐアートプロジェクトの企画・運営のほか、ファッションブランドFORM ON WORDSも手がける。主な個展に、3331ギャラリー（2011年）など。近年の主なグループ展に、「拡張するファッション」（水戸芸術館、2014年）、あいちトリエンナーレ2016、さいたまトリエンナーレ2016など。



《Peoples' House Skirt》2014

ミリメーター

宮口明子、笠置秀紀によって活動開始。建築フィールドワーク、プロジェクトなど、ミクロな視点と横断的な戦術で都市空間や公共空間に取り組む。日常を丹念に観察し、空間と社会の様々な規範を解きほぐしながら、一人ひとりが都市に関われる「視点」や「空間」を提示している。これまでの主な活動に「取手アートプロジェクト2007」（取手市全域・2007）、「ミリメーター展」（新・港村建築系ラジオギャラリー・2011）、「仙台文学館を再編集する」（SSDせんだいスクールオブデザイン・2014）、「鳥取藝術祭 川と路」（鳥取市・2015）などがある。



《3KD season2》2015

明日少女隊

2015年に誕生した、様々な性別の第4世代若手フェミニストによる、社会派アートグループ。「男性、女性、いろんな性、みんなが平等でHappyな社会を」をモットーに社会運動から展覧会やレクチャーまで幅広く活動する。これまでの主なグループ展は「Feminist Fan in Japan and Friends」（アートスペース遊工房、2015）、「Twilight Beasts」（Indian Mountain Art Residency、2015）など。レクチャーでは「保育園落ちた！選挙攻略法2016」（上智大学、2016）などがある。



《Street Events》2015

日本人アーティスト（作品展示）

〔アーティストと作品〕

高川和也 《ASK THE SELF》2015

1986年熊本県生まれ。2012年東京藝術大学大学院修士課程修了。近年は主に映画やドローイングを使った作品の制作や発表を行う。主な展覧会に「screen」(HIGURE17-15cas、東京、2014)、「Kazuya Takagawa soloshow」(3331 ArtsChiyoda、東京、2012)、「Reflection of an outsider on outsider」(Seoul Art Space GEUMCHEON、ソウル、2011)、「BEDAH VIDEO & KOPI SORE」(S-14、バンドウン、インドネシア、2011)など。



丹羽良徳 《より若い者がより歳をとったものに教育する》2016

1982年愛知県生まれ。多摩美術大学映像演劇学科卒。不可能性と交換を主軸とした行為や企てを路上などの公共空間で試みることで、社会や歴史へ介入する作品を制作。近年の展覧会に「Double Vision: Contemporary Art From Japan」(モスクワ市近代美術館、ハイファ美術館)、「六本木クロッシング2013 OUT OF DOUBT」(森美術館)他。



藤元明 《NEW RECYCLE®》2015

1975年東京生まれ。東京藝術大学卒業。1999年、コミュニケーションリサーチセンターFABRICA(イタリア)に在籍後、東京藝術大学大学院を修了。社会、環境などで起こる人の制御出来ない現象を作品として可視化している。都市の隙間を活用するアートプロジェクト「ソノ アイダ」を主催。主な展示に「HEYDAYNOW」(COURTYARDHIROO・2015)、「Negentoropy」(HAGISO・2014)「この都市で目が覚めて」(HIGURE 17-15 cas・2016)などがある。



若木くるみ 《面》2010

1985年北海道生まれ。京都市立芸術大学美術学部卒業。現代美術作家。卒業後フリーターをしていたが、友人の勧めで応募した第12回岡本太郎現代芸術賞展で岡本太郎賞、2013年六甲ミーツ・アート大賞を受賞。熊本の坂本善三美術館では30日間で30作品を制作する「若木くるみの制作道場」を開催。近年の主な展示に「また起きてから書きます」(2016、アキバタマビ21)、「ユニフォーム」(2016、Ponto15 / Finch Arts Gallery)など。



山田健二 《雪室宿》2009

美術家。固有の文化圏に遺る民俗知や遺跡、戦争遺産を含む近代遺産などを国際社会の中で流用・誤用することで生まれる葛藤や矛盾を共有するための社会実践や表現活動を行なう。3.11以降、日本やヨーロッパを中心に各地を環境難民のように移動しながら続けている活動は、より流動的な社会的立場の人間が国際社会にどう働きかけられるかという実践を含みながら、その臨界と限界に無数の段階を拡張し、新たな思考のグレースケールを浮かび上がらせる。



主催団体プロフィール

●特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

<http://www.art-society.com>

当研究センターは、都市や地域、社会に関わる芸術文化活動並びにパブリックアートの情報発信及び調査研究・実施活動に関する事業を行い、都市や地域の文化的発展と市民の文化環境の向上に寄与することを目的として活動する非営利芸術団体（2007年に設立）。多分野からユニークなゲストを招聘してインフォーマルなディスカッションする定期レクチャー・シリーズ、国外・海外での都市や地域におけるアート活動を紹介する『Public Art Magazine』の定期発行などの活動を実施している。

2010年度からは、「東京文化発信プロジェクト室(現アーツカウンシル東京)」との共催事業としてアーツ千代田3331の一室にて「P+ARCHIVE」事業を展開、全国で現在活発に実践されているアート・プロジェクト(地域・社会に関わるアート)の資料や関連書籍を収集・公開するとともに、アート・プロジェクトを記録・アーカイブ化する人材を育成することをめざしている。また同年度より、都市の貴重なオープンスペースである「公開空地」に光をあて、若手アーティストの活動発表の場を提供し、市民が楽しむことのできる都市アートイベントに着手する。

2012年度には、国際交流基金の知的交流助成を得て、米国、ドイツ、韓国、日本の専門家による国際シンポジウム「地域・社会と関わる芸術文化活動のアーカイブに関するグローバル・ネットワーキング・フォーラム」を開催した。

2013年度からは、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート(SEA)」をテーマとした連続トークイベントを開催するとともに、同領域を研究することを目的とした定期研究会をはじめ、日本でほとんど知られていないSEAの潮流を紹介するさまざまなアクションを継続的にこなってきた。

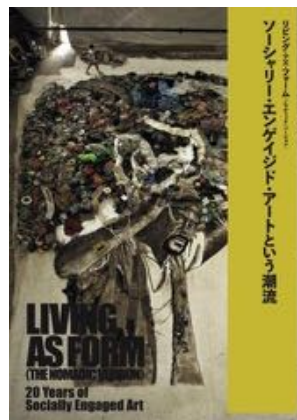
2014年11月には海外の「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」を日本に初めて紹介する展覧会《リビング・アズ・フォームのム(ノマディック・バージョン)〜ソーシャリー・エンゲイジド・アートという潮流》をアーツ千代田3331にて開催(ニューヨークのアートNPO「Creative Time」、「Independent Curators International (ICI)」との共催による)。

2015年3月には、上記展覧会の関連企画として、日本におけるソーシャリー・エンゲイジド・アートの動向を探る《SEA アイデア・マラソン公募展》を企画開催。また、パブロ・エルゲラ著『Education for Socially Engaged Art』を日本語に翻訳し、『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』としてフィルムアート社より出版。同書をテキストとする研究会も実施した。また、ソーシャリー・エンゲイジド・アートを知り、学び、議論し、実践するための新しいウェブサイト“SEAリサーチラボ”2016年2月に開設。

現在は本展開催にむけて、戦後の日本の美術の動向や社会状況の変化から国内におけるSEAの萌芽と展開を掘り起こし、読み解くことを目的としたSEAヒストリー研究会を実施している。



『Public Art Magazine』



《リビング・アズ・フォーム(ノマディック・バージョン)》パンフレット



『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』(フィルムアート社)



「SEAアイデア・マラソン」報告書



アート&ソサイエティ研究センター ウェブサイト